

# 園長だより

## 子どもにとっての劇活動

日々の保育実践が、  
子ども達のものになるには…

1月に入り、朝夕の寒さも一段と増してきました。インフルエンザの流行も急加速本格的な雨も期待できず、乾燥した日が続きます。手洗い、うがい、十分な水分を摂取しインフルエンザ感染に備えて下さい。今回の発刊からしばらくは劇の活動について綴りたいと考えています。

昨年、発刊した内容に加筆、修正を加え子ども達の活動で大切にしていることをお伝えできればと思っております。

### 行事名へのこだわり

先週、劇の会の案内を配布致しました。今年度は発表会の名称を使わず、4、5歳



「劇の会」 3歳児「劇遊びの会」と名称を変更いたしました。

取り組んでいる子ども達からすれば、この時期、生活（活動）の中心に劇活動（劇あそび）があります。従前は発表会の名称を使っていましたが子ども達にはピンときません。なぜなら生活の中心に劇の取り組みやそれに関連する遊びが展開され、発表又は発表会という名称を具体的に理解しにくい状況にあります。

子ども地点で考えれば発表会は「劇を見せよう日」となるわけです。3歳児では

日頃から遊んできた「劇遊びをする日」となり、見てもらうことよりもみんなで遊ぶことに主眼がいきます。

発表会とは言わず、劇の会という方がシンプルに子ども達の生活に馴染むと考えています。

### 保育者が考える

#### 子どもにとっての劇活動…

劇、毎年、発表会（今年は劇の会）に向けて行われている活動が惰性で繰り返されず、子ども達の生活から離れてはなりません。毎年、取り組む活動が持つ意義、意味合いを考え、活動の視点を明らかにすることが大切と考えます。

子どもの発達に対応させながら保育計画に正しく位置づけることが大切とわかっていても簡単なことではありません。計画だけが先行せず、子ども達から常に学ぶ姿勢を忘れることなく心がけています。

#### 目指しているものは何

子ども達が主役、中心になって作り上げていけるような活動を考えています。そのためには年齢毎、クラスの目標やねらいを充分に実践の中でふまえ取り組みたいと考えています。

「今年は〇〇の劇がいいかな」「何をしよう」と題材の選定に忙しく走る前に、活動の主目標やポイントを明らかにして子どもが活動できる内容（題材）を選び、選ばせていくことが大切と考えます。

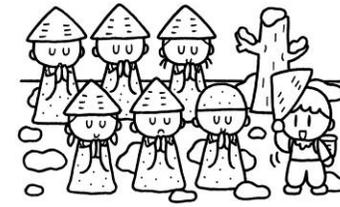
### プロセスが大切

子ども達が作り上げていく過程が大切劇の会、当日も私達は大切にしていますが、それ以上に過程を大切にしています。いかに子ども達がいきいきとし、仲間と共につくりあげていく事に楽しさを感じてもらえるのか、大人が考えたものをシナリオ通り、口移しに台詞を言い、演じるものではありません。より子ども主体！保育者主導からの脱却を意識し取り組みたいと考え実践に取り組んでいます。

日常生活で子どもが楽しんで無理なく行ってきたことをベースに活動を考えていきます。劇の活動が大人の考えたシナリオの獲得や覚え込みになってはならない、できるだけ、その活動が生活の中の遊びとおなじ位置づけになればと思っています。

### 自分の思いを伝える難しさ

私達、保育者は子ども達が生活の中で自分の思いを伝え、仲間と一緒に活動してほしいと願っています。子どもの姿は千差万別、ひとりよがりで自分の主張を押し通そうとする子、仲良しの子にすぐ同調してしまう子、仲間の意見を受け入れて活動を進められる子、年齢や育ってきた過程によって様々な姿がみられます。自分の思いを伝える事は大人からすれば簡単なことかもしれませんが、しかし、子どもの立場からすると、個人差はあるものの至難の業といってもよいでしょう。



### 3歳児なら

自己表出(喜怒哀楽)を生活の中で出す。我慢しなくていいんだよ！ありのままの自分をだして、そして、ひとりひとりが、「やってみたいな」「やりたいな」「できるかな」という気持ちを持って動き出してみる。そして「できた！みてみて！」「やれたよ！」と自己の充足と満足。新たな自己との出会いと発見を繰り返し、自分の思いを伝えていく事を生活の中で経験していきます。現在、劇活動（劇遊び）に取り組んでいます。仲間と一緒にやる背景はありますが、まずは、ひとり、ひとりの「やりたいこと、できること」をうーんと確かめさせ、楽しませたいと考えています。

#### できるだけシンプルに

保育者は幼児の劇は難しいという、演劇をやってきた人も保育園、幼稚園の劇は難しいという。それは、大人が考える劇の概念をあてはめようとするからと私は考えます。脚本があり、演出家がいる、様々な効果を取り入れたり、大人の思いが先行してしまう。そもそも、事の発端は普段、読み聞かせている絵本を遊びの中に入れ、お話の筋書きに準じながら、ひとりひとりが楽しむことから始まる。登場するものに興味を示す子もいれば、仲良しの子と遊ぶことが楽しく感じられる子もいる。

ひとつにまとめようとせず、遊びの発端からこつこつ、子どもの姿をみて取り組んでいけば同じ方向に向いていく、子ども達が楽しんでいけば、子どもなりのまとまりがでてきます。

(園長 廣部 信隆 28)